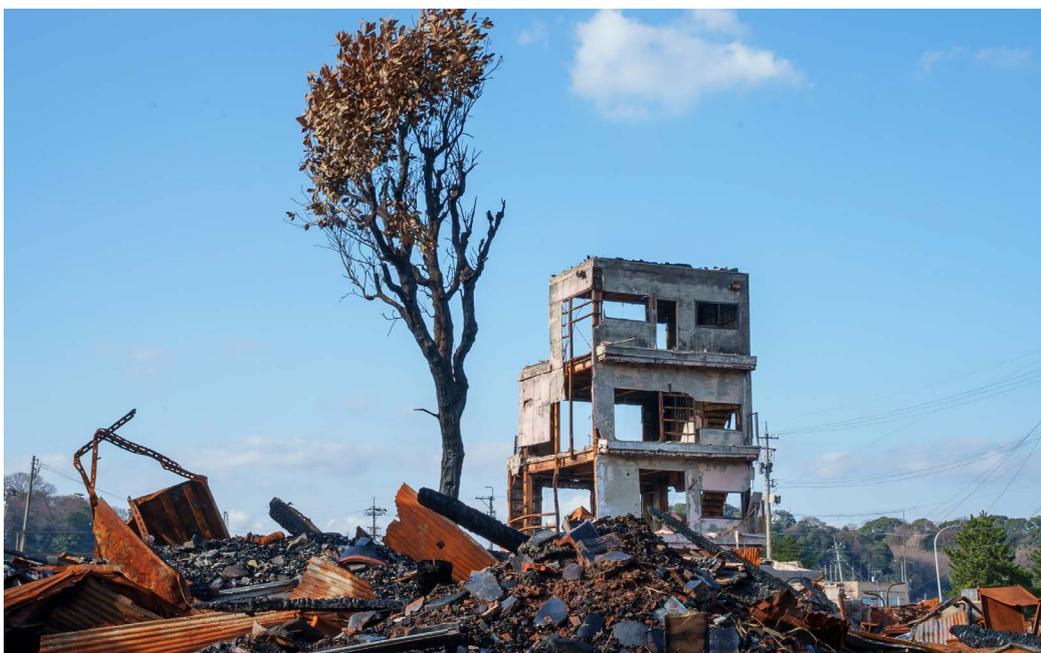


## 自分の知っている世界が崩れていくのが見えた、気がした。

2024年1月1日、自宅の居間にいた私は築120年の母家の柱が、壁と共に振り子のように左右に大きく振れているのを呆然と見ていた。我にかえると家の中は家具やものが散乱し、扉は外れ、無惨な姿になっていた。傾きつつもまだ建っている家から道へ出ると、落ちた屋根瓦やガラスが道を塞ぎ、蔵は完全に崩壊していた。津波警報にせき立てられるように、夫と私は隣人たちと共に高台にある公民館へ避難。家族や友人たちからひっきりなしにくるメッセージや電話に答えつつ、地元の人たちと眠れぬ一夜を過ごした。



あれから約2ヶ月。ようやく枕元に全ての貴重品を並べなくても寝られるようになり、いつ水がくるかまだ見えないとしても、電気はつき、電話もインターネットも繋がる。道路は整備され、災害ゴミは回収され、瓦は持ち去られていく。郵便局に行けば郵便も受け取れるようになり、近くのドラッグストアで買い物もできるようになった。公民館では洗濯ができ、自衛隊が提供してくれるお風呂もある。

これまでただただ生きるのに必死だったけれど、迫り来る現実の問題に直面するのはこれからだと思う。そもそも過疎化と高齢化がすでにかなりの規模で進んでいる能登。二次避難している

隣人たちは戻ってくるのだろうか。全壊、半壊した家は更地になってしまっのか、立て直されるのか、あるいはそのまま放置されるのか。山の中、海のそばに点在する小さな集落は今後も存続できるのか。何より、私が好きだった能登は、今後どうなるのか。ずっと住むつもりだった自分たちの家には安心して住み続けられるのか。そのための手順は、資金は…。色々な思いが交錯する。

自らも被災しながら、避難所で他の人たちのお世話をし、炊き出しをし、隣人を助ける人たちがたくさんいる。遠方から支援物資を届ける人たちや、献身的なボランティア活動をし

てくれる人たちにも会った。多くの友人が国内から、海外からメッセージや義援金という形で支えてくれようとしている。普段は見えない、自分と世界の繋がりが可視化され、一人でここにいるのではないと再確認する。人との距離が縮まったようで、今ここ黒島で自分たちができることをできるだけしたいという気持ちで日々過ごしているうち、はや3月になった。

これからどうなるのか、どうしたいのか。自分に問うても答えは揺れ動く。ただ、この土地とここで出会う人々への愛着は、以前より深まっている、それだけは揺るぎない確信としてある。

(2024年3月3日)



私たちが住む門前町黒島町では4月に入  
て水が復旧し、改めて、ライフラインが整う  
ことの有難さを実感した。基本的な生活が楽  
になり、ゆつくりとではあるが自分の家の事  
にも手がつけられるようになった。

明治29年に建った蔵は、屋根瓦が真ん中で  
落ち、壁が三方向に崩れ、隣家にもたれかかっ  
ていて危険だったこと、中のものできるだ  
け救うために、友人たちやボランティアの方々  
の手を借り、2ヶ月半かけて少しずつ解体し  
た。何人もの職人さんが年数をかけて作り上  
げた歴史ある蔵を壊してしまうのは、今後同  
じようなものは建てることできないことを  
知っているだけに、本当に残念で心が重いこ  
とだった。このような難しい判断を迫られて  
いる人は沢山いる。

母家については、傾きを修正することも  
含め少しずつでも修復しようと思っているが、  
かなりの長丁場になりそう。これからのま  
づくりについてもそうだが、5年10年、ある  
いはもっと長くかかるという覚悟で、しっか  
りビジョンを持たないと息切れしてしまう。

生活を立て直すことが最優先だが、重伝建  
(重要伝統的建造物群保存地区)を守り可能な  
限り既存の建物は修復しつつ残そう、と地域  
有志と話し合い、働きかけている。課題は多  
く、手探りで、何よりも自分の忍耐力と人間  
性が試されている。でも、そんな中で自分た



体験  
レポート  
REPORT  
4



この価値観と共鳴する友人たちとの関係は深まり、共に未来に向けてできるだけのことをやっていたころと思っている。

行政に頼りきらず、自分たちでできることはまず始めよう、という精神で色々やってきたが、その一つ、地元の宿のオーナーや夫を含む料理人などが集って1月に立ち上げた炊き出しグループ「門前みんなのごはん」は、民間の寄付金とシャンティ国際ボランティア会の協力を得て4月末まで自主的な炊き出しを続けた。

メディアから能登半島地震のニュースがほぼ消えつつあると感じるにつけ、今でも継続的に気にかけて、支えてくれる人々の有難さを感じる。夫が玄関に生けてくれた一輪の花が心を和ませ、生活を豊かにしてくれるように、私たちの毎日は、一見小さく見えることに支えられている。あたりまえということはなく、今日命があることも奇跡である。目の前のこと、その日を生きることに精一杯だった頃、漆黒の闇に輝く満天の星を見上げた時の感動、電話が繋がらず連絡が取れなかった友人に偶然会えた時の喜び、受け取ったものを隣人たちと分かち合い、支えあっていた時の時間の濃さを忘れないようにしたい。

(5月5日)